

株式会社リディラバ／  
一般財団法人リディラバ  
代表  
**安部敏樹氏**

Social

あべ・とき●1987年京都府生まれ。2006年東京大学入学。専門は複雑系。脳神経科学や社会の意思決定などを学ぶ。大学3年時に「リディラバ」を設立。2012年に一般財団法人とし、翌年には株式会社も設立。総務省起業家甲子園日本一、KDDI∞ラボ最優秀賞、観光庁長官賞など受賞多数。2012年から東京大学で「ソーシャルビジネスのためのチームビルディング」の講義を行う他、教員対象の研修も担当。大学時代には毎年、マグロ漁船に乗っていたマグロ漁師の顔も持つ。

# これからの未来を 創るために大切なのは、 課題を解く力よりも、 課題を作る力です

## —— 非当事者が参加して初めて、 社会問題は解決に向かう

大学3年生の時、なぜ社会問題が解決しないのかを仲間と議論していた、そもそも知らないから興味も持てないよねという話になりました。じゃあ、それを解決していこうと「リディラバ」をスタートしたんです。

リディラバは、「Ridiculous things lover（バカバカしいことが好きな人）」を略した造語です。ありとあらゆる人が社会問題に興味を持って気軽にアクションできる世の中にするため、社会問題という真面目なテーマをより身近なものとして捉えてもらうため、真面目なことをよりバカバカしく面白く、かつよく伝えていくことにこだわりたいと思っています。

社会問題には3つの壁が立ちほだかっていると考えています。1つ目は興味がないという「関心の壁」。2つ目は、知らない・見えないという可視化されていない「情報の壁」。3つ目は、関与の仕方がわからないという「現場の壁」。それらの壁を打ち破るために、「スタディツアー」や情報のプラットフォームとなるWEBメディア「TRAPRO（トラプロ）」などの事業を立ち上げてきました。また、企業研修や修学旅行（教育旅行）などで、社会問題の現場を当事者意識を持ちながら体験し、どうやって解決していくか議論していく事業も行っています。

スタート当初、社会問題に取り組む事業はビジネスとして成立しづらいという概念を覆したくて、様々なビジネスコンテストへの応募をしました。

取材・文／清水由佳 撮影／清水一也



### ●教育旅行

2016年4月には、中学・高校を中心に20校で修学旅行として教育旅行を実施。それぞれの学校で、生徒にどのような力をつけさせたいかという議論からスタートし、社会課題の現場を訪れ、課題解決策を考え、プレゼンテーションなども実施。



### ●スタディツアー

「パラリンピック日本代表選手と交流する、障がい者スポーツ体験ツアー」や「日本の農業の生産性を考える、農業体験ツアー」「地域医療ツアー」など、様々なNPO団体と共に、単なる見学ではなく、当事者と共に考え、ディスカッションする機会を多く設けたツアーを実施。社会問題への無関心を打破するための、重要な機会となる。



### 課題を作る力を育むには 様々な「原体験」が必須

3日に1回ペースくらいで受賞をしてきたこともあり。その後法人化も果たし、ジェンダーの問題から国防問題まで150以上のテーマでスタディツアーを開催し、3000人以上を社会問題の現場に送り届けてきました。

とかく社会問題というと、当事者ばかりが集まって議論をしている。でもそれではダメなんです。非当事者が関わることで、本当の解決に向かう。いわば社会問題の現場への道路づくりがリディアバの事業で、それが次の時代への社会インフラになっていくと確信しています。

大学卒業後は事業と並行して自分も大学院博士課程に進み（現在休学中）、一方で2012年からは東大で「ソーシャルビジネスのためのチームビルディング」という講義を行っています。さらに教員向けには、どうやって主体的にディスカッションしていく授業ができるかを、実践しながら学んでいただく研修も担当させていただいています。結局、ビジネスでも学びでも、知識のインプットは前提で、いかに議論しながら新しいアイデアを出していくか、アウトプットする力が非常に重要にな

つてきています。

そんな中で、学生を見ていて思うのは、与えられた問題を解く力は高いけれど、自分で問いを生み出す力は弱いという点です。それまで一生懸命受験勉強してきたのだから、当然といえば当然です。でも、社会では問題を与えられたものだけではなく、問題を見だし、課題そのものを作っていく力が重要になります。特に、IT化が進む社会では、問題を解くのは機械に任せればよく、人だからこそできるのは課題を作りだすこと。そこで、重要になってくるのが「原体験」です。

教科書に書いてあるままの活字の知識ではなく、様々な体験を通して当事者意識を持ち、それをベースに人を巻き込む。実際、いろいろな体験をしてきた学生のほうが、確実に伸びています。ただ、現状はそういった体験を個人的にやろうとすると非常にお金もかかり、体験格差が大きく開いていると感じます。それを解決する意味でも、我々の事業が貢献できると考えています。特に修学旅行など、まさに絶好の機会です。

ところが、体験してくれた高校生の声として気になるのが、「小・中学時代の社会のことをまじめに話して浮いてしまい、恥ずかしい思いをした。目立ちたくないと思っていた」などの感想

が多いという点。人前で発言すること、主体性をもって手を挙げることに、社会に対して関わっていくことすることを恥づかしいと思う。そういう感覚を、学校を起点として持ってしまった。大きな問題です。

これまでも、そんな教育を何とか変革していこうとしていた先生はたくさんいらっしゃいました。でも、亜流として孤軍奮闘されていた。それが2020年の教育改革に向けて、今は一気に変化のスピードを上げていくことができる。トレンドが変わり、教育の本質を大いに議論できる。そもそも、そういう社会課題に高校時代に触れた若者が、例えば全国の30%いたしたら、10年後の日本はどうなっているか。何だか面白そうじゃないですか。

私自身、最初の原体験として影響を受けたのが小学校1年の時。非常にユニークな先生でした。毎週月曜日の朝、その週の時間割を生徒みんなと話し合って決めるんです。一応、教科で必要になる時間数の指定はあるのですが、「じゃあ、今週は〇〇がしたい」とか、「この時間を2時間連続でやりたい」とか、それぞれにやりたいことを言い合うわけです。当然、意見はなかなかまとまりません。「心は一つにならない」というのが先生の口癖で（笑）。クラス対抗のドッジボール大会

の時も、「どうせ心は一つにならない。でも、戦略は共有できる」と言われ、そりやそうだと、徹底的にサインと戦略を練り圧勝しました。いい先生と出会ったと思います。

### 思考のフレームワークを議論を通じて共有する

体験を通じて、目で見て、聞いて、触れてわかるという身体性をもった学びの一方で、議論の時間をしっかりとることも重要です。

Aさんはプラン1がいいと言うけれど、Bさんはプラン2がいいと言う。Aさんは何に重きを置いて、なぜプラン1がいいと言う結論になったのか。そういうフレームワークを互いに共有していくことが、非常に大事。そういうプロセスを経て決まった結論には、メンバー全員がコミットしやすく、自発的な行動に結びついていきます。これが、今の社会では弱い。学校に限ったことではありません。

だからこそ当社では、スタディツアーや教育旅行を企画する際、ただ現場に行つて知識だけを得るようなものは作らないようにと、徹底しています。現場に立ち議論することで考え方を学べたり、社会のどこにフォーカスしているかをちゃんと学べるものにする。



### リディラバの行動7原則

- 1 なぜそうなのか、本当にそうなのか
- 2 検証せずに悩んでいないか
- 3 手を動かしているか
- 4 属人的議論をしていないか
- 5 マクロとミクロを行き来しているか
- 6 社会を塗り替えるスピード感か
- 7 仕事を学びにしているか

る。そこを強く意識しています。

また、事業はすべて、社会の無関心を打破し、社会システムの不備を是正するという理念実現のためにあります。いくら儲かるうが、この理念とずれているものは事業化しません。また、この組織文化は、リディラバで働く「個人」にも結び付いています。それらを定義づけ、言語化したのが、「行動7原則」。リディラバがスタートした頃から、無意識にみんながやってきたことを改めて言葉にしたもので、日常的にこの7原則にのっとって自分たちの行動を振り返っています。

### 高校までに動機つける地域の戦略としての教育

スタディツアーの中には、地域活性化など地方の課題に関するものも多く、そこから移住や転職などにつながるケースも増えてきました。そこで地域のリアルなクチコミを集める「TRAPPRO 移住クチコミ」というサイトも開設しました。今後の社会を語るうえで、「地域」は重要なキーワードです。特に、地域の中の教育、地域の戦略としての教育の位置づけは非常に大きいと思います。

18歳になって進学のため都市部に出ていった若者に、出ていってから「戻ってきて」と引き戻すのは並大抵のことではありません。しかし、高校までに地域の課題を見て、「この課題を解決するために、こういう力をつけなくては。そのために進学して戻ってこよう」と動機づけする。出ていく前に、地域に対しての思いを育成することが大事で、それは、教育でしかできないことだと思っています。

そのような可能性が、教育にはある。そもそも教育とは何か。社会の一員として、どういう能力をつけさせたいか。そういう本質的な議論が不可欠だと思っています。

入試が変わるといことは、これまでの受験一辺倒のヒエラルキーも変わるということ。何よりも、非常にワクワクする未来が開けている。現場の課題から、共に議論をぜひ深めていきたいと思います。



『いつかリーダーになる君たちへ』  
安部敏樹著、坂口菊恵監修  
日経BP社